

学 位 論 文 要 旨

氏 名 瀬川 海

題 目 身体障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担軽減

障害児のスポーツ活動をサポートする保護者は、様々な負担を抱えている。それらの負担は、障害児の競技力が向上すると同時に大きくなっていく。そこで、保護者が障害児を持続的にサポートするには、自身の負担を軽減し、サポート活動とうまく付き合うことが重要になる。しかし、障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減する手段を検討した研究は、極めて少ない。保護者の負担感を和らげる手段として、運動が効果的であると予想されるものの、その効果は検証されていない。また、多忙な保護者にとって、何度も運動プログラムに参加することは難しいことから、実用的な手段は未だ見つかっていない。そこで、短期間で保護者の負担感を和らげることができ、かつ効果が持続する手段の検討が必要である。したがって、本研究の目的は、障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減する手段を検討することであった。

研究Ⅰでは、スポーツ活動に取り組む障害児をサポートする保護者の負担を軽減する要因を検討した。障害児のスポーツ競技を長くサポートしてきた保護者8名と身体障害児8名の親子を対象に、半構造化インタビューを行い、「パラ水泳に取り組む身体障害児の競技に対するモチベーションと保護者が身体障害児の競技活動をサポートする姿勢の変容プロセス」を明らかにした。それらのプロセスを基に、研究課題①では、障害児のスポーツ活動を長くサポートする保護者のサポート姿勢を解明した。また、研究課題②では、保護者が長くサポートする障害児のモチベーションを高める要因を解明した。研究課題①を検証した結果、保護者は、子どもの変容を認識する姿勢や、子どもが取り組む競技について理解する姿勢を持って、身体障害児の競技活動を継続的にサポートすることで、身体障害児と適度な距離間を取っていたことが示された。さらに、研究課題②を検証した結果、身体障害児は、保護者のサポートを得ながら身近な人の継続的なサポートを認識すること、アスリートとなったことを自覚すること、社会性の成長を実感することによって、競技へのモチベーションを高く保ち、競技を継続していたことが示された。これらのことから、障害児のスポーツ活動を長期的にサポートしてきた保護者は、障害児のモチベーションを高め、あらゆる負担とうまく付き合うサポート姿勢と、親子の適度な距離間を理解していることが明らかとなった。研究Ⅰで明らかになった知見を知っておくことが、将来的に障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減する手段となると考えられる。

研究Ⅱでは、研究課題③の短期的な親子運動プログラムが、障害児のスポーツ活動をサポートする保護者のソーシャルサポート（以下、SS）、セルフ・エフィカシー（以下、SF）、運動への態度やストレスにもたらす効果を検証した。さらに、研究課題④において、プログラム後の運動継続性を検討した。身体障害児3名と母親3名を対象に、2日間、1日1回30分の親子運動を実施した。研究課題③を検証した結果、3名の保護者のうち2名は、SSを高めることができ、心理的・身体的なストレス値の高かった1名は、ストレスを軽減することができた。さらに、運動への態度について、1名は感情的態度に肯定的な変化が生じ、手段的態度は2名が向上した。SFについて、1名はポジティブな効果を得ていたが、2名はポジティブな効果だけでなくネガティブな効果も得ていた。また、研究課題④を検討した結果、3名のうち2名の母親が、親子運動の1ヵ月半後でも、可能な範囲で自らの生活に合わせて、親子運動を継続していた。よって、親子運動の効果の継続性が確認された。しかし、親子で運動する場合に、母と子のタイミングを合わせることが難しく、日常的に実施しにくいことが指摘されている。よって、今後は、保護者のSFにもポジティブな効果をもたらすような、親子運動の内容や実施回数を再検討し、より効果的な親子運動を開発する必要がある。

以上の研究Ⅰと研究Ⅱの結果から、保護者のサポート負担を軽減するためには、保護者が障害児のスポーツ活動をサポートする姿勢や、親子の適度な距離間を理解することが重要であることが示唆された。また、障害児のスポーツ活動をサポートする保護者が他の親子と一緒に運動することで、SSを得ることができる可能性や、自宅でも親子運動を継続することができるようになる効果が期待できた。さらに、ストレス値が高い保護者のストレスが軽減する可能性が示された。これらの知見は、多忙な保護者にとって、負担感を和らげる実用的な手段となることが期待できる。将来的に、保護者の負担を軽減することができ、障害児のスポーツ活動を長くサポートすることができると考えられる。